

## 大学生における食卓空間の演出に関する認知と学習 状況

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00007340">https://doi.org/10.14945/00007340</a>

## 大学生における食卓空間の演出に関する認知と学習状況

Survey of the Awareness and Use of Table Setting among University Students

村上陽子

Yoko MURAKAMI

（平成24年10月4日受理）

### Summary

A questionnaire was conducted on awareness and use of table settings, which asked students about their attitudes and opinions on various issues, such as experiences with and reasons for using tablecloths and place mats. Additionally, colors used for table linen were surveyed among 343 university students, including 130 males and 213 females. The following results were obtained. In homemaking textbooks for elementary, junior high, and high school, there was little description of table settings. The majority of students, both males and females, had experience using tablecloths. Male students had little experience with the use of place mats compared to female students. Reasons for using table linen included “keeping the table clean,” but did not include, “it is inconvenient without it”. The percentage of students wanting to use tablecloths was higher for females than males. Regarding the introduction of the subject of table settings in homemaking classes, there were many positive opinions among females, but many negative opinions among males. White was mostly used for tablecloths, while various colors, including chromatic colors, were used for place mats. Students’ general color preferences differed from their specific preferences for table linen. In current homemaking education, the study of table settings is not sufficient. Teaching materials development in this area is needed.

### 1. はじめに

食事には、①健康や生命活動を維持する機能、②食嗜好を満たす機能、③コミュニケーションツールとしての機能がある。②食嗜好を満たす機能は、いわゆる、おいしさに関わる機能であり、味・におい・食感などの食べ物側の要因以外に、食べる人の生理的・心理的状态、食環境など様々な要因が関係している。食べる人と食べ物の状態の関わりが最適になった場合に初めてアメニティ（快適性）が生まれ、「おいしく食べる」ことが出来る<sup>1)</sup>。

「テーブルコーディネート」とは、おいしいものをよりおいしく食べるための食空間演出<sup>2)</sup>であり、その役割として、①人々の五感を刺激し食物をおいしそうに見せる、②食空間全体の構図と調和を図る、③食事をする人々のコミュニケーションを図るなどがあり、食事の機能と深い関連がある。テーブルコーディネートにおける食卓を彩るアイテムには、テーブルクロス・ランチョンマットなどがあり、昔から欧米では、食卓を演出する習慣がある。洋の食卓文化ではテーブルクロスは欠かせないものであるが、お膳という文化で培われた日本の食卓文化

には、もともとテーブルクロスを敷くという習慣はなかった<sup>3)</sup>。日本の一般家庭においてダイニングテーブルで食事をするようになったのは高度成長期以後であり<sup>2)</sup>、テーブルコーディネート<sup>1)</sup>の歴史の浅い日本においては、テーブルクロスなどの敷物を用いて「食空間を彩る」という習慣はあまり根付いていないように思われる。加えて、現代の日本においては、「食卓を彩る」ことは蔑ろにされる傾向にある。齊藤<sup>4)</sup>は、世代別の食卓の彩りを調査し、年齢が下がるにつれて食卓の色彩が乏しくなると報告している。これは、子どもたちの食に対するあり方にも影響を及ぼすと考えられる。食事に際し、空腹を満たすという役割だけでなく、食を楽しむという考えを児童生徒に伝え、体験させていくことが求められている。

心身ともに健康で安全で快適な食生活のために、食育は喫緊の課題であり、平成17年に食育基本法、平成18年に食育推進基本計画が成立・施行された。平成20年の学習指導要領改訂により、学校においては家庭科などの中核として、学校の教育活動全体を通じての食育の推進が定められており、小・中・高等学校の家庭科においては、食事の役割や栄養・調理に関する内容の充実が求められている。小学校・家庭科では「B 日常の食事と調理の基礎 (1) 食事の役割」として「ア 食事の役割と日常の食事の大切さ、イ 楽しく食事をするための工夫」が明記され、「食を楽しむ」ための学習活動が期待されている<sup>5)</sup>。中学校では「B 食生活と自立 (1) 食生活と栄養 ア 食事が果たす役割、健康によい食習慣」の中で、「小学校における食事の役割と楽しい食事についての学習と関連させて学習する」ことが言及されている。また、「B (3) 日常食の調理と地域の食文化 ウ 食生活についての課題と実践」において、「自分や家族の食生活をさらに豊かにするための工夫を考え (中略)、食生活をよりよくしようとする意欲と態度を育てる」とある<sup>6)</sup>。テーブルコーディネートのように食卓を演出する活動は、食を楽しむ学習を促進する一助となると考えられる。また、食事の様々な楽しみ方を知るとともに、目的やテーマに応じて演出方法を考えることにより、創造力や自己表現力も育成できる。

そこで、本研究では、テーブルコーディネートをを用いた食育教材を開発するために、食卓空間の演出に関する認知と学習状況について検討した。加えて、おいしさと深く関わる食卓環境の色彩、特にテーブルクロスについて検討した。食卓・食空間演出について、これらに着目した報告はほとんどなく、本研究の新規性といえる。食卓演出について、成田ら<sup>7)</sup>は、家庭におけるテーブルクロスの利用率は26%、伊藤ら<sup>8)</sup>は普段は約20%で、来客時など特別な行事の際には約30%に上がると報告している。しかし、これら調査では、いずれも食への興味・関心が高い食生活専攻の学生が対象となっている。食に対する興味・関心の高低は、食卓・食空間演出に対する興味・関心にも影響すると考えられる。そこで本研究では、食について専門的に学んでいない学生も調査対象に含めることとした。また、調査に先立ち、小学校、中学校、高等学校の家庭科の教科書におけるテーブルコーディネートについての記述内容を検討した。これにより、食卓演出に関する学習の課題を把握し、食の充実を図る一助とする。

## 2. 方法

### (1) 教科書分析

小・中・高等学校の家庭科の教科書分析を行なった。対象は、各校種における家庭科の教科書 (小学校2冊<sup>9)</sup> <sup>10)</sup>、中学校2冊<sup>11)</sup> <sup>12)</sup>、高等学校22冊<sup>13)</sup> <sup>34)</sup>) とした。尚、これらは平成10年改訂の学習指導要領に基づくものである。分析する内容はテーブルコーディネートに関する記述とし、キーワードとして13個 (「テーブルコーディネート」「テーブルセッティング」「食卓の

演出・工夫」「テーブルクロス」「ランチョンマット」「ナプキン」「食器・食具」「小物類」「外部環境」「配膳・食卓様式」「食卓作法・マナー」「配色」「楽しい食事」を設定し、キーワードに関する用語と写真の数を比較・検討した。

教科書分析に先立ち、平成10年改訂の学習指導要領解説・家庭編における記述を検討した。尚、本研究で注目する食卓演出については下線を記した。「食事の役割」として、小学校では「体を成長させたり活動のもとになったりする働きや、家族が楽しんだり心を和ませたりする働きがある」<sup>35)</sup>、中学校では「生命の維持をはじめ、健康の保持増進や成長のために必要（中略）、規則正しい食事が生活のリズムを作り、食事を共にすることによって人と人との関係を深めることができる」<sup>36)</sup>、高等学校（家庭基礎）では「栄養的な充足とともに、家族や人々とのコミュニケーションの促進、精神面の充足や安定に果たす役割が大きい」<sup>37)</sup>とあり、高等学校の家庭総合およびフードデザインには、具体的な記述は見られなかった。

## (2) テーブルコーディネートに関する調査

調査対象は静岡大学教育学部学生2～4年生（男子130名、女子213名、計343名）、調査期間は2009年5～6月である。調査は質問紙法で行ない、すべて選択式とした。授業開始時、あるいは終了時に質問紙を配布し、記入後ただちに回収した（有効回収率・回答率100%）。回答は無記名とした。主な質問項目は、学生本人に関する項目、テーブルクロス・ランチョンマット・テーブルコーディネートに関する項目、色彩に関する項目である（全45項目）。有意差の分析は、 $\chi^2$ 検定、独立性の検定、コルモゴロフ・スミルノフの検定を用いた。尚、居住形態として、自宅生は男子30人、女子78人、下宿生は男子100人、女子135人であった。

## 3. 結果および考察

### (1) 教科書分析

#### 1) 小学校

比較した2社の間において、キーワードに関する掲載数について顕著な差はなかった。いずれも大きく取り上げられておらず、記述の多くが目立たない箇所書かれていた（表1）。

K社<sup>9)</sup>では、「テーブルコーディネート」の記載はなく、「テーブルセッティング」は「家族の昼食を作ってみよう」というチャレンジコーナーで見られたが、言葉の定義や内容、方法などについての具体的な記述はなかった。また、「ランチョンマット」は食分野では記載がなく、被服分野での製作（「ランチョンマットを作ろう」）や家族分野での記載であった。

T社<sup>10)</sup>では、テーブルコーディネート、テーブルセッティングいずれの用語もなく、テーブルコーディネートに関する用語の半数が「楽しい食事」であり、その学習の一つとして、食事の目的に合わせた食器や食卓の工夫を提案していたが、具体的な手立ての記述はなかった。

以上のことから、小学校の食分野においては栄養や調理に関する学習に重点がおかれ、食卓構成についての学習や、五感を用いて食空間を楽しむ活動は軽視される傾向にあるといえる。

「楽しい食事」は、小学校学習指導要領解説・家庭編<sup>35)</sup>の内容「(5) 簡単な料理 オ盛り付けや配膳を考え、楽しく食事ができること」に該当するが、その内容の取扱いとしては「でき上がった料理を、みんなで楽しく食べるために、（中略）食器の扱い方などを見苦しくないようにしたりするなど工夫して一緒に食事ができるようにする」とあり、食空間や食卓環境への配慮について具体的方策は記されていない。食卓を整えるということは、食に関する技能の一つである。技能の定着や技能の活用能力の育成のためには、方法やその手だてを示すこと、

表1 小学校「家庭科」<sup>9) 10)</sup> および中学校「家庭科」<sup>11) 12)</sup> の教科書におけるテーブルコーディネートに関するキーワードと写真の記載数

キーワード	小学校		中学校	
	K社	T社	K社	T社
テーブルコーディネート				
テーブルセッティング	1		2	1
食卓の演出・工夫		1		2
テーブルクロス				1
ランチョンマット	3	2		
ナプキン				
食器・食具		1	1	
小物類		1		1
外部環境			3	4
配膳・食卓	2	1		2
食卓作法・マナー			2	3
配色			1	1
楽しい食事	3	6	5	4
合計	9	12	14	18
写真*	8	8	31	29
文献番号	9)	10)	11)	12)

\*写真は調理例，食卓風景を表す。

学校および家庭において繰り返し実践し経験を積み重ねることが重要である。それにより，子どもたちは想像力を働かせ，創造力を生かし，主体的に取り組むことができるようになる。食に関する基礎的・基本的な知識・技能の習得が求められる児童期において，食事の多様な楽しみ方やその意義を学習させることが，日常における活用に繋がるといえる。

## 2) 中学校

中学校では，両社とも調理実習のページが増加していたが，小学校同様，2社の間で用語や写真の掲載数に相違は見られなかった（表1）。

K社<sup>11)</sup> について，「テーブルセッティング」は，小学校では「家族の昼食を作ってみよう」という学習で補足的に掲載されていたが，中学校では会食の箇所で見られた。

T社<sup>12)</sup> では，食分野において，テーブルクロスや花などテーブルコーディネートに使う具体的なアイテム名が挙げられていたが，文章のみの記述であり，どのように飾り付ければよいのかなど，写真や図を用いた紹介はなかった。住居分野では，「おいしく見せる照明」というコラムが1ページ載っており，食卓の演出効果について述べられていた。

学習指導要領解説（技術・家庭編）<sup>36)</sup> において，テーブルセッティングは「A (5) 食生活の課題と調理の応用 イ 会食について課題をもち，計画を立てて実践できること」に関連する。ここでは，「家庭，学校，地域の人々との交流などのために，会食の目的を明確にして，そのためにどうしたらよいかなどの課題をもって会食の計画を立てて実践できるようにする」とある。指導上の注意として「実態に即して，取り組み易い課題を，生徒が主体的に選定し，会食の案内，食事の内容やテーブルセッティングなど，各自の創意工夫を生かすようにする」とあるが，続けて「楽しく会食するためには，お互いに食べ方や話題などのマナーに気をつける必要があることについても気付くようにする」とあり，学習の重点はこの後半部分に置かれているといえる。また，これは選択履修であるため，未履修の生徒もいると考えられる。

以上，中学校では，テーブルコーディネートは食分野における会食の学習と関連していた。しかし，小学校同様，用語や内容，方法が提示されていないため，学習経験のない中学生にとってイメージしにくく，計画から実践に至るまで困難であると考えられる。学習をより確かなも

表2 高等学校「家庭基礎」教科書におけるテーブルコーディネートに関わるキーワードと写真の記載数<sup>13) ~22)</sup>

キーワード	家庭基礎									
	K社	T社	J社①	J社②	TA社①	TA社②	KY社①	KY社②	H社	D社
テーブルコーディネート										
テーブルセッティング			1							
食卓の演出・工夫										
テーブルクロス	1									
ランチョンマット										
ナプキン							1		2	
食器・食具	1	2	1	1			1	1	1	
小物類			1							
外部環境	2	2	2		2	4	1	1		2
配膳・食卓	1	4		4	2	1	4	2	7	
食卓作法・マナー	5	3	1		4	4	2	5	7	
配色	2	2	1	3		2	1	5		2
楽しい食事	1	1	2	1	4	2	1	1	1	2
合計	13	14	9	9	12	14	10	15	18	6
写真*	9	7	12	7	3	4	5	15	5	12
文献番号	13)	14)	15)	16)	17)	18)	19)	20)	21)	22)

\*写真は調理例，食卓風景を表す。

表3 高等学校「家庭総合」<sup>23) ~32)</sup> および「フードデザイン」<sup>33) ~34)</sup> 教科書における  
テーブルコーディネートに関わるキーワードと写真の記載数

キーワード	家庭総合										フードデザイン	
	K社	T社	J社①	J社②	TA社①	TA社②	KY社①	KY社②	H社	D社	J社	KY社
テーブルコーディネート	1										30	19
テーブルセッティング	1				1	1			1		3	0
食卓の演出・工夫	3										4	12
テーブルクロス											16	9
ランチョンマット											5	5
ナプキン	1		1		2	1		1	3	1	8	6
食器・食具	1	3	1	1	2	1	1	2	2	1	28	21
小物類	1										30	11
外部環境	4	3	2	3	1	1	1	1		2	10	12
配膳・食卓	2	4	1	3	4	3	8	4	5	5	5	9
食卓作法・マナー	3	5	2	3	4	5	4	4	7		5	6
配色	2	1	1	1	1	2	1	1	1		7	6
楽しい食事	3	2	1	3	3	2	1	2	2	1	6	8
合計	22	18	9	14	18	16	16	15	21	10	157	124
写真*	11	13	16	10	9	7	11	16	11	17	42	76
文献番号	23)	24)	25)	26)	27)	28)	29)	30)	31)	32)	33)	34)

\*家庭総合の写真は調理例，食卓風景，インテリアデザイン，フードデザインの写真は調理例，テーブルコーディネート例を表す。

のとするためには，記載内容をより詳細にし，テーブルクロスや食器や食具をはじめとする，食卓演出に関する知識を付与するとともに実践を行なう必要がある。これにより，食卓演出についての学びが深まり，食における興味・関心の向上に繋がると考えられる。

### 3) 高等学校「家庭基礎・家庭総合」

「家庭基礎」で記載が最も多かったのは「食卓作法・マナー」であり，「テーブルコーディネート」「食卓の演出・工夫」「ランチョンマット」の記載はなかった（表2）。また，「テーブルクロス」は食卓演出の学習ではなく，使わなくなったテーブルクロスをエプロンに作りかえようというリメイクの学習で用いられていた<sup>13)</sup>。

「家庭総合」では，テーブルコーディネートは住居分野で扱われているものがあつた（表3）。TA社②<sup>28)</sup>では，部屋のインテリアデザインの学習内容においてその一例が掲載され，KY社

②<sup>30)</sup>では、「人工照明の役割」において、照明の違いにより部屋の雰囲気が変わることに触れており、その例として食卓風景が挙げられていた。D社<sup>32)</sup>では、裏表紙に「快適な住空間づくり」として部屋のインテリアデザイン例があり、コーディネートされた食卓も掲載されていた。

学習指導要領解説・家庭編（家庭基礎）<sup>37)</sup>では、食は「(2) 家族の生活と健康」で扱われている。「食卓作法・マナー」の掲載が多かったのは、内容の構成及びその取扱いの中の「(イ) 食品と調理」において「配膳や食事マナーを取扱い、楽しく食事する工夫ができるようにする」とあるためと思われる。食卓演出については、「(ア) 家族の栄養と食事」に「食事が栄養的な充足とともに家族や人々とのコミュニケーションの促進、精神面の充足や安定に果たす役割が大きいことに気付かせる」とあり、これと関連する。しかし、ここでは同項目に記載されている「家族の健康な食生活を営むためには、栄養的にバランスのとれた食事が重要であることを認識」させるために、「栄養的な特徴について理解」し、「栄養的にバランスのとれた食事を具体的に考えることができるようにする」に重点が置かれているといえる。同じことが、家庭総合にもいえる。

こうしたことを反映して、家庭基礎・家庭総合ともに栄養に関する内容が多く、食の楽しさに関する学習が少なかったと考えられる。また、分野別にみると、食分野での扱いは少なく、一例としての紹介ではあるが、住居分野での取扱いの方が多かった。このことから、食分野における学びの充実を図るとともに、住居分野と食分野の学習を系統的に関連づけることにより、食卓環境に関する多角的な学びや食卓環境への意識の高揚へ繋げることができるといえる。

#### 4) 高等学校「フードデザイン」

フードデザインは家庭の専門教科の一つである。小学校・中学校、および高等学校の普通教科（家庭基礎、家庭総合）と比較すると、用語や写真の数が多く、内容も専門的で多岐に渡っていた。どの用語も多く取り上げられていたが、特に「テーブルコーディネート」「テーブルクロス」「食器・食具」「小物類」「外部環境」が多く、より具体的な内容となっていた。また、J社<sup>33)</sup>では、「5章：料理様式とテーブルコーディネート」(pp.114～139)、KY社<sup>34)</sup>では、「第3章：献立と調理」の中の「3：様式別の献立と調理・食卓作法」(pp.103～114)、「4：テーブルコーディネート」(pp.115～123)と構成されており、1つの章あるいは節としてテーブルコーディネートが取り上げられていた。こうした系統的な学習により、生徒の興味・関心の高揚、知識・理解の深化が期待できる。

#### 5) まとめ

小学校「家庭」、中学校「家庭」、高等学校「家庭基礎・家庭総合・フードデザイン」の教科書を分析した結果、フードデザインを除いて、栄養、調理などに関する内容が多かった。テーブルコーディネートに関しては本文での記述が少なく、殆どが補足的な記載であった。このことから、食卓演出に対する学びは、重点が置かれているとは言い難い状況にあるといえる。

食事をおいしく食べるためには、目で見えて楽しく、食べる人の五感を満足させ、会話のはずむ食卓づくりが重要であり、季節や行事、食事の目的などに応じて食卓を演出する必要がある。そのためには、①テーブルクロス類については種類と特徴を理解し、素材や色の効果と関連させて目的に応じた選択と取扱いが出来ること（被服分野との関連）、②食卓花などの食卓装飾や、照明や色彩の効果を理解すること（住居分野との関連）、③食卓構成については、日本料理、西洋料理、中国料理など各料理の特徴やそれに適した食卓演出の相違を学ぶこと、④食器については種類と特徴を理解し、料理に応じて適切に選択すること、⑤料理の盛り付け方の工夫が

できることが求められる<sup>37)</sup>。テーブルリネン、食器、装飾小物、照明器具などは食空間の構成要素の一つである<sup>1)</sup>。食事の大切さや楽しさを深め、食生活を豊かにするためには、その役割について多角的な視野と多面的なアプローチが必要である。既存の栄養・調理等の学習に加えて、食卓に配慮する学習、食卓を大切にする学習を取り入れることが求められる。

(2) 食卓演出に対する大学生の認知や意識

戦後、ライフスタイルの変化とともに、食卓においてもテーブルクロスやテーブルマット、ナプキンなどが普及してきた<sup>2)</sup>。テーブルクロス、ランナー、ナプキンなど食卓で使うファブリック全般をテーブルリネンといい、食卓を飾る上で重要な役割を果たす<sup>2)</sup>。テーブルクロスは食卓の料理を引き立てる後光効果があり、食空間を自由自在に変化させることができる<sup>38)</sup>。テーブルクロスは、正式には「白」「無地」とされるが、家庭においては、季節、料理、食器、インテリアを主な基準として選択することができる<sup>2)</sup>。また、ランチョンマットはテーブルマットの一つであり、カジュアルなテーブルに用いられる。本稿では色彩のもたらす視覚的効果をはじめ、多様な機能をもつテーブルクロスとランチョンマットに着目し、その使用状況等を検討した。

1) テーブルクロスの使用経験および使用頻度

テーブルクロスの使用経験の有無を調査した (図1)。

「今までに一度以上テーブルクロスを使用したことがある」と回答した者は、男女とも過半数を超えており (全体68.2%, 男子58.5%, 女子74.2%), 男女間で有意差が見られた (p<0.01)。

テーブルクロスの使用経験者を対象に (男子76人, 女子158人), 使用頻度を調べた (図2)。回答項目として、「毎日」「週に4~6回」「週に1~3回」「月に数回程度」「年に数回程度」「一度だけ」「その他」を設定し、一つ選択してもらった。また、下宿居住形態別 (自宅, 下宿) に

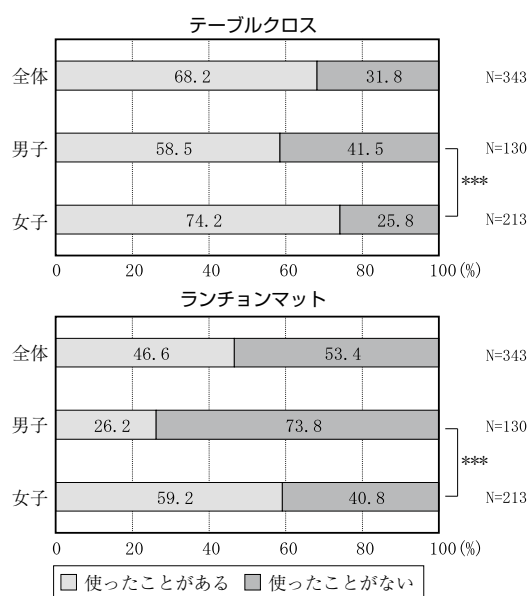


図1 テーブルクロスおよびランチョンマットの使用経験

テーブルクロスおよびランチョンマットの使用経験の有無について検討した (男子130人, 女子213人)。男女間の有意差はχ<sup>2</sup>検定により分析した (\* p<0.1, \*\* p<0.05, \*\*\* p<0.01)。

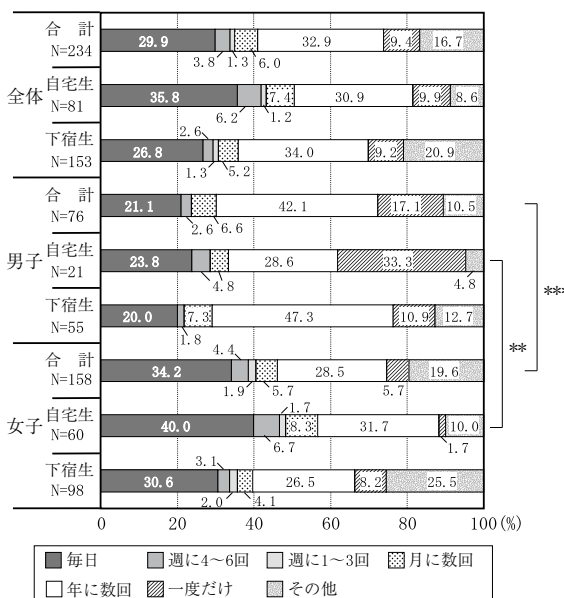


図2 居住形態の違いによるテーブルクロスの使用頻度

テーブルクロスの使用頻度について、居住形態に相違により検討した。これまでに一度以上テーブルクロスを使用した経験があると回答した者 (男子76人, 女子158人) を対象とした。

男女間の有意差, または同一性間における居住形態の相違による有意差はコルモゴロフ・スミルノフの検定により分析した (\* p<0.1, \*\* p<0.05, \*\*\* p<0.01)。



使用頻度を分析した。まず、自宅・下宿をあわせた結果から述べる。

全体では「年に数回程度」(33.2%),「毎日」(30.2%), 男子では「年に数回程度」(43.2%),「毎日」(21.6%), 女子では「毎日」(34.2%),「年に数回程度」(28.5%)と続き、男女では1位と2位が逆転していた(男女間で有意差あり,  $p < 0.01$ )。「その他」では、「実家や学校で使っていた」という回答が多かった。

居住形態別にみると、全体では、下宿生よりも自宅生の方が「毎日」の割合が高く、自宅生に比べて下宿生は「その他」が多かった。これは、下宿生において「実家で使用している」と回答した者が多かったためである。自宅生と下宿生の間の差異を検討したところ、男女とも有意差は認められなかった。また、自宅生・下宿生それぞれにおける男女差については、自宅生のみ、男女間で有意差が見られた ( $p < 0.05$ )。

次に、「毎日」「週に4~6回」を高頻度群、「週に1~3回」「月に数回程度」を中頻度群、「年に数回程度」「一度だけ」を低頻度群とすると、全体・男女すべてにおいて中頻度群の割合が著しく低かった。このことから、テーブルクロスは習慣的に使用するか、あまり使用しないかのいずれかに偏っていることが示唆された。

## 2) ランチョンマットの使用経験および使用頻度

ランチョンマットの使用経験の有無を検討した(図1)。

「今までに一度以上ランチョンマットを使用したことがある」という者は、全体46.6%, 男子26.2%, 女子59.2%であった(男女間で有意差あり,  $p < 0.01$ )。テーブルクロスと比較すると、ランチョンマットはテーブルクロスに比べて使用経験が低かった。また、テーブルクロスの場合

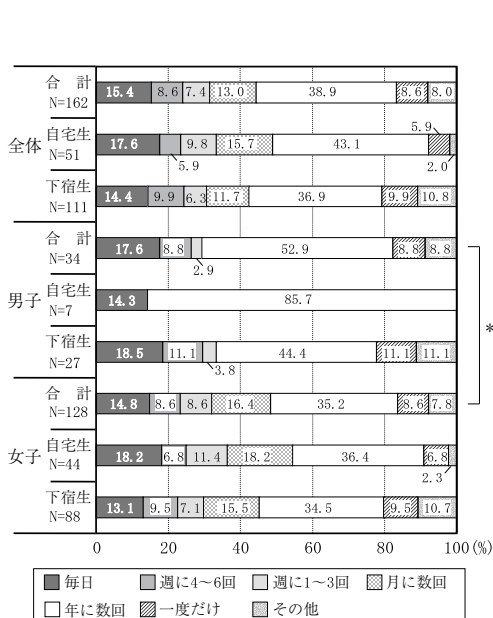


図3 居住形態の違いによるランチョンマットの使用頻度

ランチョンマットの使用頻度について、居住形態に相違により検討した。これまで一度以上ランチョンマットを使用した経験があると回答した者(男子34人、女子128人)を対象とした。男女間の有意差、または同一性間における居住形態の相違による有意差はコルモゴロフ・スミルノフの検定により分析した(\* $p < 0.1$ , \*\* $p < 0.05$ , \*\*\* $p < 0.01$ )。

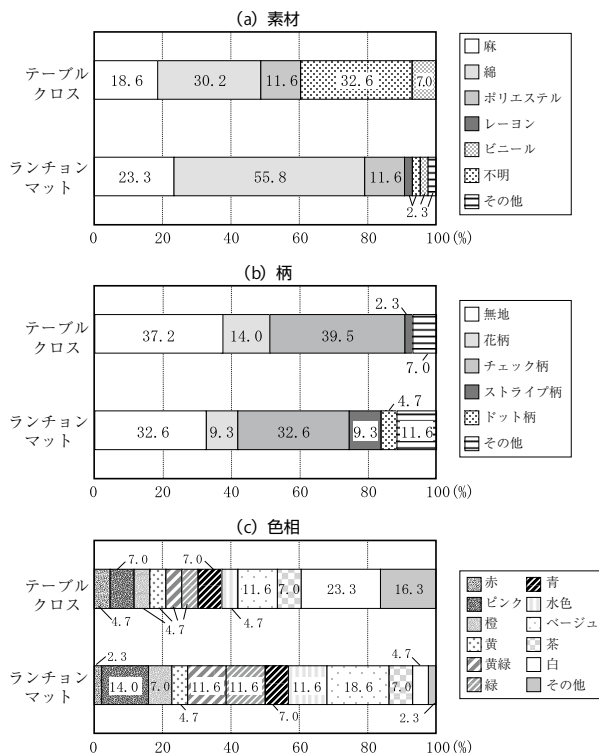


図4 主に使用しているテーブルクロスおよびランチョンマットの素材・柄・色相

現在、テーブルクロスおよびランチョンマットを使用している人(テーブルクロス:43人、ランチョンマット42人)について、素材・柄・色相を検討した。

合よりも、使用経験の有無における男女差が大きかった。

ランチョンマット使用経験者について（男子34人，女子126人），使用頻度を調べた（図3）。まず，自宅・下宿をあわせた結果について，男子では「年に数回程度」（52.9%）、「毎日」（17.5%），女子では「年に数回程度」（36.5%）、「月に数回程度」（16.7%）と続き，男女で相違が見られた（ $p < 0.01$ ）。「その他」については，男女とも「実家で使っている」が多く，それに加えて「小学校で，ランチョンマット給食というものがあつた」という回答がみられた。

居住形態別にみると，男子の自宅生では，「毎日」と「年に数回程度」に二極化した，使用経験者が少なく，傾向は明らかとならなかった。女子については，自宅生および下宿生においてよく似た結果が得られ，「年に数回程度」が最も多かった。

使用頻度別（高・中・低頻度群）に分析すると，女子は中頻度群と低頻度群は高く，高頻度群は低かった（男女間で有意差あり， $p < 0.05$ ）。ランチョンマットは通常，食事の時にのみ使用するため，習慣的に毎日使用するというより，状況や気分に応じて使用されると思われる。

テーブルクロスに比べて，自宅生におけるランチョンマットの使用者の割合は低かった（ $p < 0.05$ ）。その要因として，ランチョンマットは，①複数ある多様な皿をまとめるのに役立つ，②パーソナルスペースを明確にし，テーブルコーディネートに変化をもたらすなどの利点をもつ。しかし，自宅での食事では他の家族と食事をする事が多く，家族構成員分のランチョンマットを用意する手間がかかること，また，大皿に料理を盛り付けたものを食べることもあるため，それぞれにランチョンマットを用意する家庭が少ないと考えられる。

### 3) 使用しているテーブルクロス・ランチョンマットの素材，柄，色

現在，テーブルクロスやランチョンマットを使っているか，使用状況を調べた。その結果，使用している人は，テーブルクロスは男子7.7%（10人），女子15.5%（33人），ランチョンマットは男子3.1%（4人），女子18.3%（39人）であった。使用経験者の「毎日」と回答した人と比べてその数が減少したのは，「毎日」の中には，下宿生が「実家で毎日使っていた」という過去の経験を含めて回答している人がいたためと考えられる。

次に，現在使用しているテーブルクロスやランチョンマットの素材・柄・色を検討した。素材は「麻，綿，ポリエステル，レーヨン，ビニール，不明，その他」，柄は「無地，花柄，チェック柄，ストライプ柄，ドット柄，その他」，色は「赤，ピンク，橙，黄，黄緑，緑，青，水色，紫，ベージュ，茶，白，黒，その他」を選択肢とした。柄がある場合は，一番多く使われている基調色を選択してもらった。ここでは回答者が少ないために，男女を合わせた結果を述べる。

#### ①テーブルクロス

素材としては，「麻」「ビニール」「綿」が多かった（図4）。一方で，「不明」と回答する者もあり，布等の素材についての知識の乏しさや関心の薄さが示唆された。

テーブルクロスの生地素材として，一般には麻（リネン（亜麻），ラミー（苧麻））が代表とされるが，他にポリエステル，レーヨン，ビニールなどがある<sup>1) 2)</sup>。近年では手入れの簡便性とコスト面を優先し，化学繊維との混紡や撥水加工を施したものを使用する家庭やホテル，レストランが増えている<sup>39)</sup>。今回の結果においても，ビニールの回答が多かったことから，日常においては手軽さや手入れの簡便さなどが重視されていると考えられる。

柄については「チェック柄」「無地」が多く，色については男女とも「白」が多かった。格式のあるレストラン等では「白」のテーブルクロスが正式であるとされている<sup>2)</sup> こと，白はどんな色とでも合わせることが出来ること，清潔感を感じさせることなどが影響していると思われる。

## ②ランチョンマット

ランチョンマットの素材として、「綿」の割合が高かった(図4)。その理由として、洗濯などの手入れが簡単であること、ランチョンマットが売られている雑貨屋などにおいて綿素材のものが多く、安価であることなどが考えられる。柄は「無地」「チェック柄」が多かった。テーブルクロスと比べて「ストライプ柄」や「ドット柄」が多く、ランチョンマットは柄や模様の入ったものを使用することが多いといえる。また、使用されている色は様々であった。ランチョンマットは、食卓空間に色味を加えるために用いられていると考えられる。

食卓における色彩調和を考えた場合、色面積の大きいテーブルクロスは、配色の中で最も広い部分を占める基調色(背景の色)となる。この基調色に、ランチョンマットや皿などを用いることで副調色と強調色が組み合わされ、全体の配色が整う。たとえば、回答の多かった白いテーブルクロスに色味のあるランチョンマットという組合せは、有彩色一色と無彩色一色で構成された単色調和であり、色彩調和のとれた配色である。基調色となるテーブルクロス自体に柄や模様が入っていると、こうした色彩調和を乱す懸念がある。一方、ランチョンマットはテーブル(またはテーブルクロス)全体に占める面積比が小さいために副調色である。副調色として基調色との調和がとれていれば、その中に柄や模様があっても、それらは色面積がさらに小さくなるため強調色となり、色彩調和の乱れは起こり難くなる。そのため、ランチョンマットは、テーブルクロスに比べて色や柄のあるものが多く用いられていると思われる。テーブルクロスやランチョンマットを食卓にうまく取り入れることにより、季節感を出したり、イメージを変えたりすることができるため、食卓演出のバリエーションが広がると思われる。

## 4) リネン類を使用する理由

現在、テーブルクロス(男子10人、女子32人)、またはランチョンマットを使用している人(男子4人、女子39人)を対象に、その使用理由について調査した(図5)。回答については14の選択肢を設定し、複数回答とした。これらを7つに分類し、「見た目がきれい」「料理がおいしそうに見える」「おしゃれに見える」「インテリアとして」は『外観』、「気分が良い」「食欲がわく」は『心理』、「インテリアに興味がある」「テーブルコーディネートに興味がある」は『興味・関心』、「机が汚れない」「机の色を隠せる」は『機能性』、「金銭的に余裕がある」は『経済性』、「昔から習慣として使っている」は『習慣』、「なんとなく」「その他」は『その他』とした。

### ①テーブルクロスを使用する理由

男女とも「机が汚れない」が最も多く、機能性を重視しているといえる。次いで「見た目がきれい」「料理がおいしそうに見える」と上位3位が一致しており、男女で同じ傾向が見られた。「インテリアに興味がある」や「テーブルコーディネートに興味がある」は低く、テーブルクロスを使用している人であっても、食卓環境への興味・関心は低いことが示唆された。「料理がおいしそうに見える」は全体で23.8%であり、テーブルクロスが料理を引き立てる後光効果を感じている人もいたことから、使用していない人に対してこうした効果の理解を促すことで、食卓環境について再認識させ、日常の食卓環境を整える手がかりとなるといえる。

### ②ランチョンマットを使用する理由

最も多かったのは「机が汚れない」であり、「見た目がきれい」「おしゃれに見える」と続いた。テーブルクロスと比較すると、「おしゃれに見える」「料理がおいしそうに見える」「インテリアとして」が高く、ランチョンマットについては『外観』を重視する人が多い傾向が見られた。ランチョンマットは、テーブルクロスよりも容易に食卓に取り入れることができること

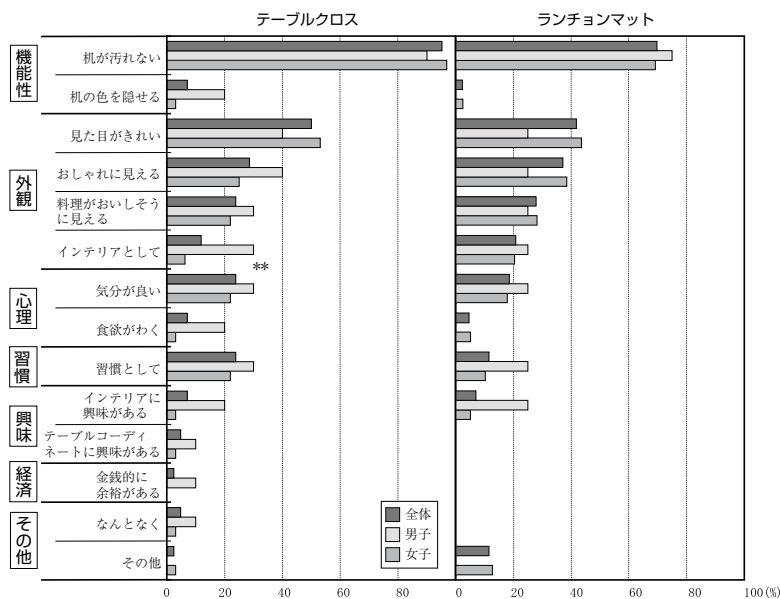


図5 テーブルクロスおよびランチョンマットを使用する理由

現在、テーブルクロスおよびランチョンマットを使用している人（テーブルクロス：43人、ランチョンマット42人）について、使用する理由を検討した（複数回答）。各項目について、男女間の有意差を独立性の検定により分析した。男女間で有意差のあったものは、女子のバーの上に記した（\* p<0.1, \*\* p<0.05, \*\*\* p<0.01）。

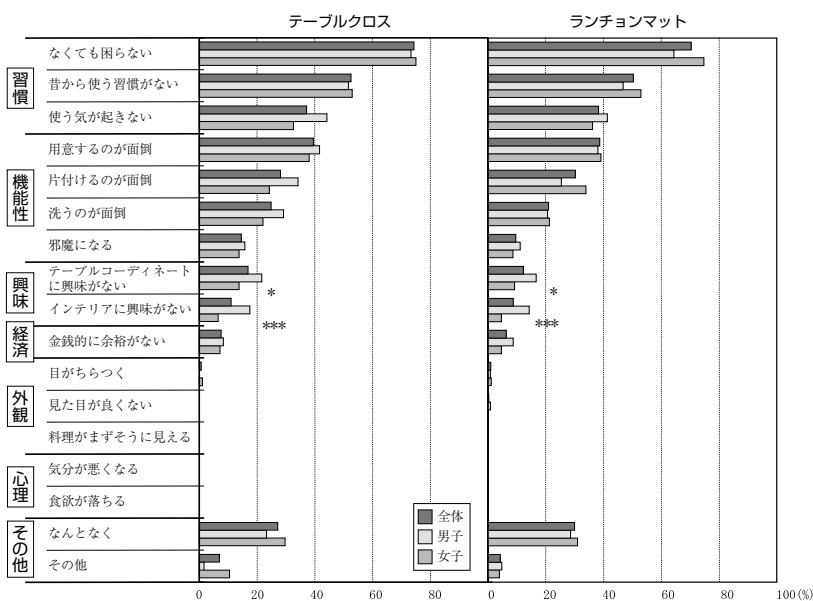


図6 テーブルクロスおよびランチョンマットを使用しない理由

現在、テーブルクロスを使用していない人（男子120人、女子181人）、およびランチョンマットを使用していない人（男子126人、女子174人）について、使用しない理由を検討した（複数回答）。各項目について、男女間の有意差を独立性の検定により分析した。男女間で有意差のあったものは、女子のバーの上に記した（\* p<0.1, \*\* p<0.05, \*\*\* p<0.01）。

から、手軽な外観の変化を求めたと考えられる。「その他」については、「食事のスペースを確保するため」「作業する時間と食事の時間を区別するため」という回答が得られた。これは、ランチョンマットにより場所や時間の区別を行い、食卓環境を整えようとしているといえる。

5) リネン類を使用しない理由

現在テーブルクロスを使用していない人（男子120人、女子181人）、またはランチョンマットを使用していない人（男子126人、女子174人）を対象に、使用しない理由を検討した（図6）。

回答として17の選択肢を設定した(複数回答)。「見た目が良くない」「料理がまずそうに見える」「目がちらつく」は『外観』,「気分が悪くなる」「食欲が落ちる」は『心理』,「テーブルコーディネートに興味がない」「インテリアに興味がない」は『興味・関心』,「邪魔になる」「洗うのが面倒」「用意するのが面倒」「片付けるのが面倒」は『機能性』,「購入する余裕がない」は『経済性』,「昔から使う習慣がない」「なくても困らない」「使う気がない」は『習慣』,「なんとなく」「その他」は『その他』と7つに分類した。

#### ①テーブルクロスを使用しない理由

男女とも「なくても困らない」,「昔から使う習慣がない」と続き,次いで男子は「使う気がない」,女子は「用意するのが面倒」であった。性別に関わらず,普段からテーブルクロスを使う習慣がなく,そうした状況の中で食事しているために「テーブルクロスがなくても食事に困らない」という心理が働いていると思われる。また,「テーブルコーディネートに興味がない」( $p < 0.1$ ),「インテリアに興味がない」( $p < 0.01$ )は男子が女子より有意に低かったことから,男子がテーブルクロスを使わない要因の一つとして,食卓環境への興味・関心の低さが考えられる。全体の傾向として,『習慣』に加えて,「用意するのが面倒」「片付けるのが面倒」「洗うのが面倒」などの『機能性』も高く,テーブルクロスの扱いにくさが敬遠の一因と考えられる。

#### ②ランチョンマットを使用しない理由

男女とも「なくても困らない」「昔から使う習慣がない」が多く,次いで男子では「使う気がない」女子では「用意するのが面倒」であった。「その他」については,「おぼんを利用して」「テーブルクロスを使用している」などが挙げられた。男女間では,「テーブルコーディネートに興味がない」( $p < 0.1$ ),「インテリアに興味がない」( $p < 0.01$ )で有意差が認められた。男女とも,テーブルクロスを使用しない理由と同じ傾向を示し,『習慣』『機能性』の点からランチョンマットを使用しないといえる。

#### 6) リネン類の利用に対する希望度合

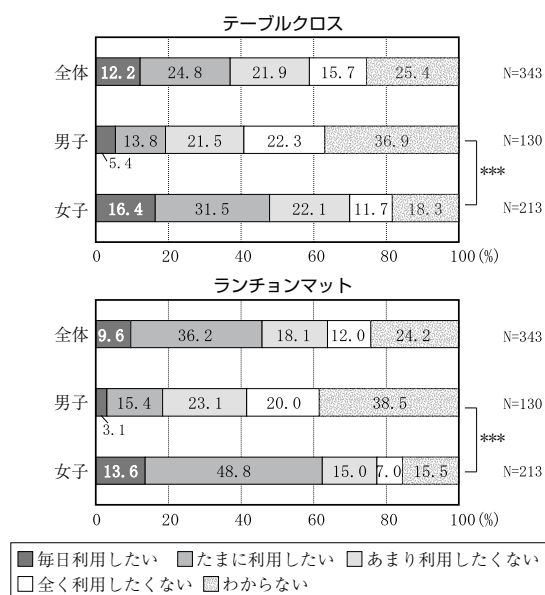


図7 テーブルクロスおよびランチョンマットの利用に対する希望度合

テーブルクロスおよびランチョンマットの利用の希望度合について検討した(男子130人,女子213人)。男女間の有意差は $\chi^2$ 検定により分析した(\* $p < 0.1$ , \*\* $p < 0.05$ , \*\*\* $p < 0.01$ )。

テーブルクロスやランチョンマットを利用したいか、その希望度合を調査した(図7)。回答は、「毎日利用したい」「たまに利用したい」「あまり利用したくない」「全く利用したくない」「わからない」から1つを選択してもらった。また、「毎日利用したい」「たまに利用したい」を肯定的回答、「あまり利用したくない」「全く利用したくない」を否定的回答として分析した。

#### ①テーブルクロスへの利用

男子では「わからない」(36.9%)、女子では「たまに利用したい」(31.5%)が最も多く、男女間で相違が見られた( $p < 0.01$ )。全体では肯定的回答37%、否定的回答37.6%と意見が二分されていた。男女別では、肯定的回答は男子19.2%、女子47.9%、否定的回答は男子43.8%、女子33.8%であり、男子はテーブルクロス利用に対して否定的( $p < 0.01$ )、女子は肯定的( $p < 0.01$ )といえる(男女間で有意差あり、 $p < 0.01$ )。女子はテーブルクロスの使用経験者も多く(図1)、現在の使用の有無を問わず、その効果を実感していると考えられる。「テーブルクロスを使用しない理由」(図6)として、約3割が「なんとなく」と答え、確たる理由で使用しない人もいたことから、その効果や利点を理解させ、日常に結びつけていくことが必要である。

#### ②ランチョンマットの利用の希望度合

男子では「わからない」が最も多く(38.5%)、否定的回答(43.1%)が肯定的回答(18.5%)より高く( $p < 0.01$ )、テーブルクロスと同様の傾向が見られた(図7)。女子では「たまに利用したい」(48.8%)が最も多く(男女間で有意差あり、 $p < 0.01$ )、肯定的回答(62.4%)が否定的回答(22.0%)より有意に高かった( $p < 0.01$ )。また、テーブルクロスより肯定的回答が高かった( $p < 0.01$ )。ランチョンマットの利点として、入手のしやすさ(安価)、用意や手入れの簡便性、食卓変化の多様性、小物や雑貨としての魅力などが挙げられる。こうしたことから、女子においては男子よりも希望が高く、かつテーブルクロスより支持が高かったと思われる。

テーブルクロスと比べた場合、全体では肯定的回答(45.8%)が否定的回答(30.1%)より有意に高かった( $p < 0.01$ )。「利用したい」と考えている者が半数近くいたことから、アプローチ方法を工夫することで利用者の増大も期待できる。また、「(1)教科書分析」において、被服分野でランチョンマットの製作が扱われていた。こうした学習をうまく活用し、実際に家庭で使えるランチョンマットを製作・利用することで日常生活に取り入れていくことができる。

### 7) 食事の際に配慮する点

テーブルクロスなどの食卓環境について、日常の食生活における位置づけを把握するために、食事の際にどのようなことに配慮しているかについて調査した(図8)。回答項目は24個設定し(複数回答)、7つのカテゴリーに分類した。「料理の盛り付け方」「料理の色」「料理の香り」「食材」「料理の種類」「調理方法」は『料理』、「食器」「箸・フォーク・スプーン等の食具」は『食器・食具』、「食卓全体の色」「テーブルクロス」「ランチョンマット」「花などの飾り」は『食卓環境』、「部屋の雰囲気」「室内温度」「室内の明るさ」「室内の音」「部屋の広さ」は『室内環境』、「テーブルの高さ」「テーブルの広さ」「イスの高さ」は『テーブル・イス』、「食事マナー」「一緒に食べる人」「喫煙・禁煙」は『食事環境』、「その他」は『その他』と設定した。

男子では「一緒に食べる人」50.0%、「食材」49.2%、「料理の種類」48.5%と続いた。女子では「料理の盛り付け方」が69.5%で最も多く、次いで「料理の種類」61.5%、「料理の色」56.8%であった。男女間では、「料理の盛り付け方」「料理の色」( $p < 0.01$ )、「料理の香り」「料理の種類」「食卓全体の色」「テーブルクロス」( $p < 0.05$ )、「食器」「室内温度」( $p < 0.1$ )で有意差があり、「料理の香り」と「室内温度」以外は女子の方が高かった。女子では上位3項目

全てが『料理』であり、料理に関心があると思われる。また、「食卓全体の色」「料理の色」「食器」などについても女子の方が有意に高く、女子は男子よりも色彩を重視する傾向があるといえる。

全体では、『料理』と『食事環境』に回答が集中していた。本研究で着目している『食卓環境』の回答は非常に少なく、最も下位に位置していたことから、テーブルクロスなどの『食卓環境』は不可欠なものでなく、「なくても困らないもの」と認識されていると思われる。

## 8) テーブルコーディネートについて

### ① テーブルコーディネートの認知度とその情報源

「テーブルコーディネートという言葉を知っているか」という質問により、認知度を検討した。また、「聞いたことがある」と答えたテーブルコーディネート認知者について、その情報源を検討した。回答項目は、「本・雑誌、テレビ、インターネット、広告、CM、家族、友人・知人、習い事、小学校、中学校、高等学校、大学、その他」とし、複数回答とした。

認知している者の割合は全体37.0%、男子19.2% (25人)、女子47.9% (102人)であり、女子に比べて、男子は少なかった(男女間で有意差あり、 $p < 0.01$ )。

その情報源をみると、男女とも「テレビ」が最も多く(男子84.0%、女子72.5%)、「本・雑誌」(男子32.0%、女子49.0%)、「インターネット」(男子12.0%、女子8.8%)と続いた。女子は食事の際、「料理の盛り付け方」を最も重視していたことから(図8)、テーブルコーディネートに対する興味が元々高いこと、また、女性のよく読むファッション雑誌などには、料理や食に関する記事が定期的に連載されていたり不定期に特集が組まれたりすることから、テーブルコーディネートを知る機会が男子より多いと考えられる。一方、学校教育を情報源とする者の割合は少なかった(6~8%)。教科書分析の結果(表1~表3)から、テーブルコーディネート

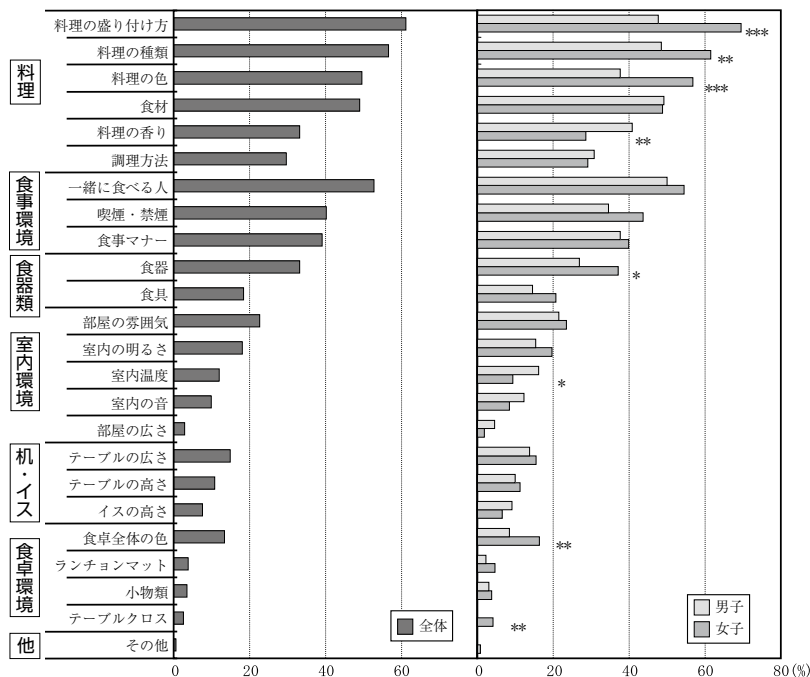


図8 食事の際の配慮

日常の食事において、どのようなことに配慮しているのか検討した(男子130人、女子213人、複数回答)。男女間の相違は独立性の検定により分析した(\*  $p < 0.1$ , \*\*  $p < 0.05$ , \*\*\*  $p < 0.01$ )。有意差のあった項目は、女子のバーの上に記載した。

に関する学習が少なかったことも認知度の低さに繋がったと考えられる。

②テーブルコーディネートの内容に関する認知

テーブルコーディネートの認知者を対象に、具体的にどのようなものと認識しているかについて検討した(図9)。回答は複数回答とした。

男女とも「食空間を演出する」が最も多く、次いで「食卓を飾る」「食卓を華やかにする」であった。「誰かをおもてなしする」「料理をさらにおいしくさせる」「特別な時に行く」はやや低く、特に「料理をさらにおいしくさせる」という後光効果について、男子は低かった。

テーブルコーディネートという言葉を知らなかった人を対象に、「テーブルコーディネートとはどういうものと思うか」と質問したところ、「内容自体は知らないが、その言葉の意味を類推して答える」ことを前提として、「食卓を飾る」「食空間を演出する」という回答が得られたが、「誰かをおもてなしする」「食事をより楽しむ」「料理をさらにおいしくさせる」という回答は見られなかった。

伊藤ら<sup>8)</sup>は、短大生にテーブルコーディネートを教えるにあたり、テーブルコーディネートに使われる様々なアイテムに関して基礎的な知識、テーブルコーディネートにおける役割、使用することによる効果について知ること、また、自分なりに食事の目的を明確化し、演出スタイルを決定していくという経験を積むことが大切であるとしている。加えて、テーブルコーディネートは表現活動ではあるが、ややもすれば表現だけを目的としたものとなってしまう、食事をする場としての機能が失われる場合も少なくないことを指摘している。テーブルコーディネートの本質は、人が主役として食事を楽しむためである。実際にコーディネートを行ない、そのテーブルで喫食することで、食卓演出の効果や、日常の食事では味わうことのできな

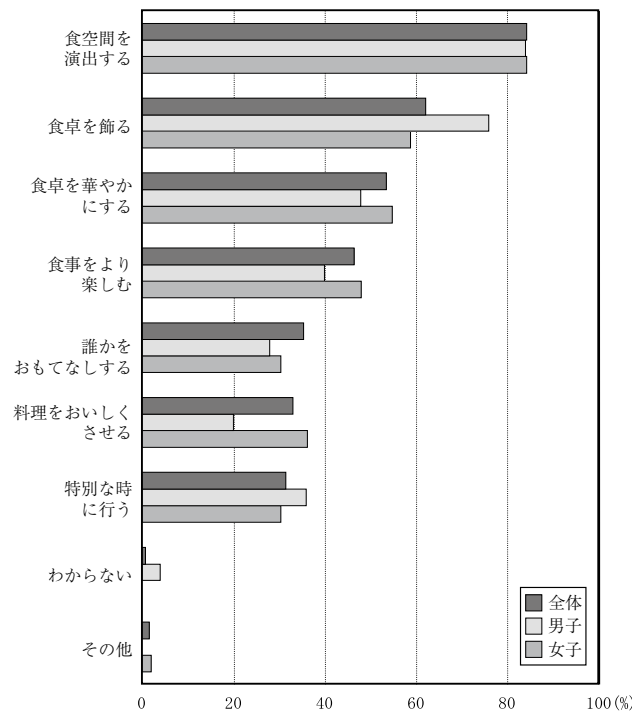


図9 テーブルコーディネートの内容に関する認知

テーブルコーディネートを認知している者を対象に、その内容をどのように捉えているかを検討した(男子25人、女子102人、複数回答)。男女間の相違は独立性の検定により分析した(\* p<0.1, \*\* p<0.05, \*\*\* p<0.01)。



い心理効果を体感し、利用に繋げていくことが重要である。

### ③テーブルコーディネートの学習について

#### ア) 学校でのテーブルコーディネートの学習経験

小・中・高・大学で「テーブルコーディネート」を学んだことがあるかを検討した。

学習経験がある者は、全体4.4% (15人)、男子1.5% (2人)、女子6.1% (13人)であった(男女間で有意差あり、 $p < 0.05$ )。男女とも「学んでいない」が9割を超えており、学校教育においてテーブルコーディネートに関する授業が行なわれていなかった。

平成10年の学習指導要領改訂により完全学校週5日制が規定され、授業時数が大幅に減少し、いわゆる「ゆとり教育」が始まった。家庭科についても、小学校第5学年では70時間から60時間へ、第6学年では70時間から55時間へ、中学校第3学年では70~105時間から35時間へと縮減された(中学校第1, 2学年については70時間のまま改訂なし)。本調査の対象者はほぼ全てがこのゆとり教育という環境で学習してきているため、授業時数の減少に伴う学習内容の希薄化の影響を受け、学習経験者が少なかったと考えられる。また、「(1)教科書分析」でも述べたように、学習指導要領にテーブルコーディネートの内容に関する直接的な記載がなく、教科書においてもその学習内容は少なかった。このことが、学習経験の低さに繋がったといえる。

#### イ) テーブルコーディネートの学習時期・教科・内容

テーブルコーディネート学習者(男子2人、女子13人)を対象に、テーブルコーディネートの学習時期と教科、学習内容を調査した。学習時期は「小学校、中学校、高等学校、大学、その他」、教科は「国語、算数・数学、社会、理科、英語、保健体育、図画工作・美術、家庭、技術、クラブ・部活動、校外学習、総合的な学習の時間、その他」、学習内容は「料理・食卓の配膳(セッティング)、食卓の色彩、食器・箸(食具)、テーブルクロス、ランチョンマット、ナプキン、食卓のマナー、その他」を設定し、複数回答とした。以下、男女合わせた結果を示す。

学習時期については、「中学校」7人、「高等学校」6人、「大学」3人、「小学校」1人であった。教科書分析では、テーブルコーディネートに関するキーワードは、全体的に中学校が最も多く、次いで高等学校、小学校という順であった。中学校が多かったのは、①選択履修ではあるが、学習指導要領にテーブルセッティングが言及されているため、②教科書の記載が多いほど、授業内でその学習内容に触れる機会も増えるためと思われる。しかし、学習者数が非常に少ないため、具体的な傾向は把握できなかった。

教科および学習内容については、回答者全員が「家庭科」における「料理、食卓の配膳」と答えた。本研究で着目している「食卓の色彩」は3人、「テーブルクロス」「ランチョンマット」は2人と少なく、ほとんど学習されていなかった。食卓環境については、家庭科における学習の充実を図るとともに、図工・美術、技術、総合的な学習の時間など他教科と連携することで新しい視点を取り入れ、児童生徒の食に対する意識を高めていくことが今後の課題といえる。

#### 9) テーブルコーディネートへの興味・関心

テーブルコーディネートについて知りたい、学びたいと思うかについて調査した(図10)。回答は、「とても知りたい」「できれば知りたい」「あまり知りたくない」「全く知りたくない」「特に何も思わない」のうち、1つを選択してもらった。また、「とても知りたい」「できれば知りたい」を肯定的回答、「あまり知りたくない」「全く知りたくない」を否定的回答とした。

男子では「特に何も思わない」(55.4%)、女子では「できれば知りたい」(68.1%)が最も高

く、男女間で有意差が見られた ( $p < 0.01$ )。肯定的回答は男子27.7%、女子72.3%、否定的回答は男子16.9%、女子5.7%であり、テーブルコーディネートへの興味・関心は女子の方が男子よりも高いことが示唆された ( $p < 0.01$ )。

次に、テーブルコーディネートの認知度の違いが、興味・関心の度合へ影響するのかを検討した。肯定的回答と否定的回答を比較すると、男女ともテーブルコーディネート認知者の方が肯定的回答の割合が高かった。このことから、テーブルコーディネートの認知が、興味・関心の惹起につながると思われる。つまり、テーブルコーディネートに触れる機会やきっかけを作り出すことで、テーブルコーディネートについて知りたい、学びたいという感情が生まれ、「食」への意識も高まることが期待できる。

### 10) テーブルコーディネートに関する学習の家庭科導入に対する要望

テーブルコーディネートに関する学習を家庭科に導入することについて検討した (図11)。回答は「ぜひ取り入れてほしい」「できれば取り入れてほしい」「あまり取り入れてほしくない」「取り入れてほしくない」「特に何も思わない」とし、「ぜひ取り入れてほしい」「できれば取り入れてほしい」を肯定的回答、「あまり取り入れてほしくない」「取り入れてほしくない」を否定的回答として分析した。

男子は「特に何も思わない」(66.2%)、女子は「できれば取り入れてほしい」(59.6%)が高く ( $p < 0.01$ )、男子は肯定的回答22.3%、否定的回答11.5%、女子は肯定的回答67.6%、否定的回答3.3%で、男女で有意差が見られた ( $p < 0.01$ )。男子については、テーブルコーディネート自体の関心が低かったため、家庭科への導入への意欲の低さに反映したと考えられる。女子は、テーブルコーディネートの認知度・関心ともに高かったことから、家庭科への導入を希望する者が多かったと考えられる。

次に、テーブルコーディネートの認知度の違いが、家庭科導入に対する意識に影響するかを

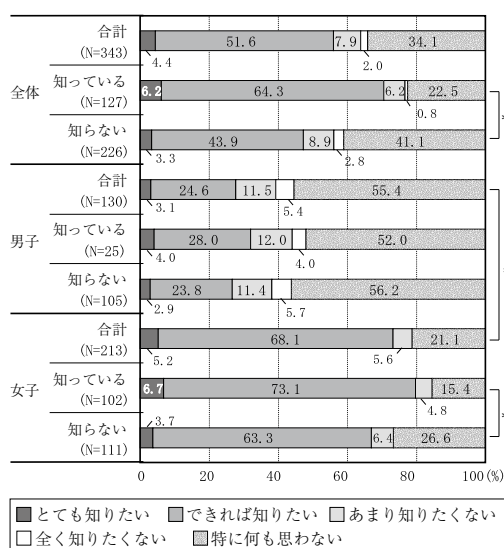


図10 テーブルコーディネートに対する興味・関心

テーブルコーディネートに対する興味・関心について検討した (男子130人、女子213人)。男女間の有意差はコルモゴロフ・スミルノフの検定により分析した (\*  $p < 0.1$ , \*\*  $p < 0.05$ , \*\*\*  $p < 0.01$ )。  $p < 0.05$ , \*\*\*  $p < 0.01$ )。

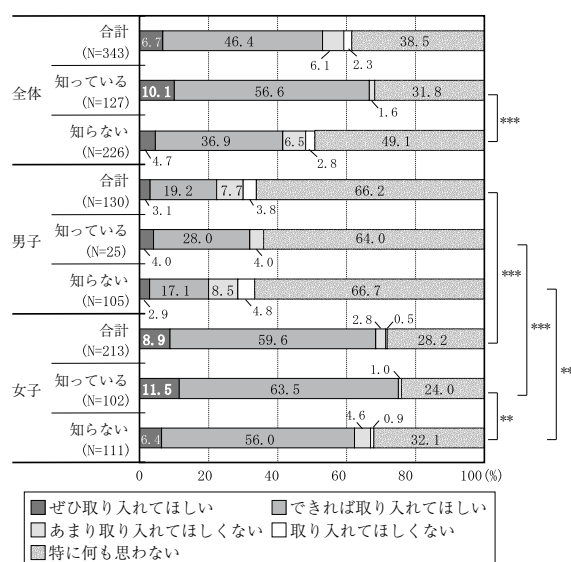


図11 テーブルコーディネートに関する学習の家庭科への導入への要望

テーブルコーディネートに関する学習について、家庭科への導入の希望について検討した (男子130人、女子213人)。男女間の有意差はコルモゴロフ・スミルノフの検定により分析した (\*  $p < 0.1$ , \*\*  $p < 0.05$ , \*\*\*  $p < 0.01$ )。

検討した。肯定的割合は認知者では男子32%，女子74.5%，非認知者は男子20%，女子62.4%であり，男女とも認知者の方が肯定的回答が高かった。また，認知者は否定的回答が低かった。このことから，テーブルコーディネートをすることで，学習意欲が高まるといえる。

現在の家庭科教育における調理教育では，調理過程と出来上りに重点が置かれ，その料理をどこでどのように食べるかといった食卓環境についての配慮や指導はあまりなされていない。子どもたちの自立のためには調理指導も重要であるが，食を多面的に指導していくことも必要である。料理に合わせて食器を選ばせたり，好みのランチョンマットを使用させたりする指導を，調理教育に加えていくなどの工夫が求められる。

### 11) 一般的な色の嗜好性とリネン類に対する色嗜好性の関連

一般的な色の嗜好性（好きな色と嫌いな色），およびテーブルクロスやランチョンマットに使いたい色について調査した（図12，図13）。回答項目は，「赤，ピンク，橙，黄，黄緑，緑，青，水色，紫，ベージュ，茶，白，黒，その他」とした。嗜好性の高い色（または低い色）については，「一番好きな色」「二番目に好きな色」「三番目に好きな色」（または嫌いな色），テーブルクロスやランチョンマットに使いたい色については「一番目に使いたい色」「二番目に使いたい色」を上記回答項目からそれぞれ選択してもらった。

#### ①一般的な色の嗜好性（嗜好性の高い色と嗜好性の低い色）

「一番好きな色」で最も多く選ばれた色は，男子では「青」，女子では「ピンク」であった（図12）。好きな色1位～3位までを合わせた合計でみると，男子は「青」「黒」「水色」，女子は「ピンク」「橙」「水色」が多かった。青や水色などの青系の色は男女とも嗜好性が高かった。また，男女とも「白」を「3番目に好きな色」として挙げる者が多かった。一般に，「青」と「白」は

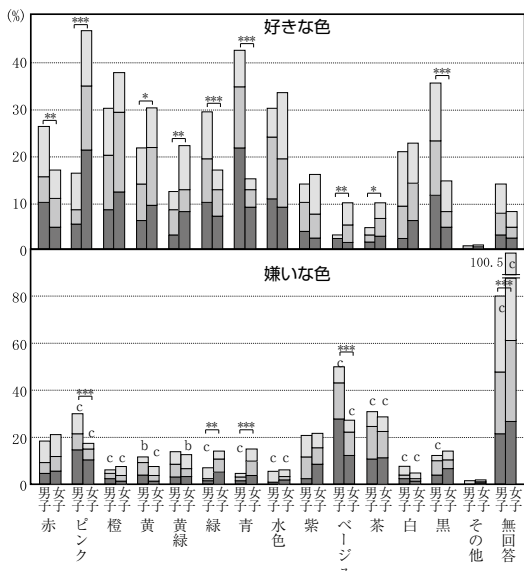


図12 一般的な色の嗜好性

一般的な色の嗜好性について検討した（男子130人，女子213人）。「一番好きな色」「二番目に好きな色」「三番目に好きな色」（または嫌いな色）について，上記色相の中からそれぞれ選択してもらった。男女間の有意差は1位～3位の合計について，独立性の検定により分析した（\*  $p < 0.1$ ，\*\*  $p < 0.05$ ，\*\*\*  $p < 0.01$ ）。また，同性同士における嗜好性の相違について，独立性の検定により分析した（a:  $p < 0.1$ ，b:  $p < 0.05$ ，c:  $p < 0.01$ ）。有意差のあるものは，それぞれの性の「嫌いな色」のバーの上に記した。

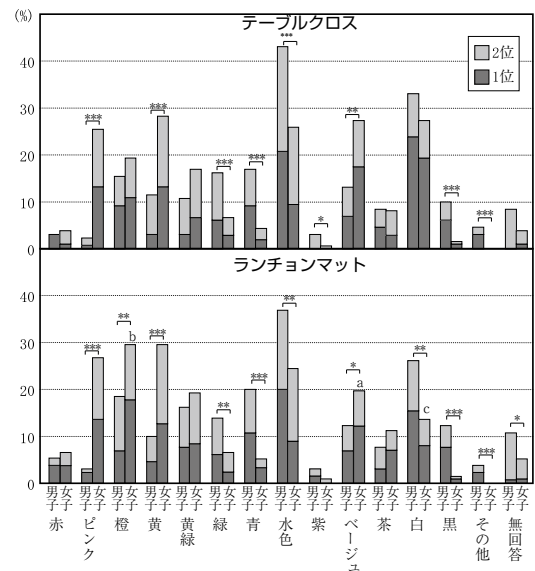


図13 テーブルクロスやランチョンマットに使いたい色

テーブルクロスやランチョンマットに使いたい色の嗜好性について検討した（男子130人，女子213人）。「一番使いたい色」「二番目に使いたい色」について，上記色相の中からそれぞれ選択してもらった。

男女間の有意差は1位～2位の合計について，独立性の検定により分析した（\*  $p < 0.1$ ，\*\*  $p < 0.05$ ，\*\*\*  $p < 0.01$ ）。また，テーブルクロスとランチョンマットで使いたい色の同性同士における相違について，独立性の検定により分析した（a:  $p < 0.1$ ，b:  $p < 0.05$ ，c:  $p < 0.01$ ）。有意差のあるものは，それぞれの性の「ランチョンマット」のバーの上に記した。

多くの人に好まれ、また、男子はニュートラルトーン、女子は「ピンク」を好む傾向があるとされており<sup>40) 41)</sup>、本調査においても同様の結果が得られたといえる。

嫌いな色1位～3位の合計を見ると、男子では「ベージュ」「茶」「ピンク」、女子では「茶」「ベージュ」「赤」であり、順位は異なるもののよく似た傾向を示した(図12)。また、嗜好性の高い色と異なり、男女とも、1位、2位、3位と順位が下がるにつれて、無回答者が増加した。渡邊らが行った嗜好色調査においても、「嫌いな色はない」と答えた者が多かった<sup>42)</sup>ことから、嫌いな色は好きな色より少ないといえる。「ベージュ」や「茶」は木の色として、昔から日本人に好まれる色である<sup>41)</sup>といわれているが、本調査では異なった結果が得られた。

色の嗜好性は、年齢・性・地域・民族などによって異なるとされるが、千々岩は、日本の学生はさえた赤やさえた黄、さえた青緑などの純色を好むこと、白と空色は時代を問わず安定して好まれていると述べている<sup>43)</sup>。さらに、言語色彩同定法を用いて色の連想調査を行なった結果、茶は老人、仕事、苦難などを連想させ、負のイメージが抱かれているとしている<sup>44)</sup>。「茶」は赤・黄・黒を混ぜた中間色であり、明度が低いことなどから、嗜好性が低かったと思われる。

## ②使用したいテーブルクロスの色

1位の結果をみると、男女とも「白」が多かった(図13)。1位と2位を合わせた結果では、男子は「水色」「白」、女子は「黄」「白」「ベージュ」であり、白、白を混ぜた明清色(水色、ベージュ)、および黄など、明度の高い色相が選ばれていた。

テーブルクロスで使いたい色相について、「ピンク・黄・ベージュ」などの暖色や明度の高い色相は女子の方が男子より高かった。「緑・青・水色・紫・黒」などの中性色や明度の低い色相は男子の方が女子より高かった。「赤・橙・黄緑・茶・白」は男女でほぼ同様であった。

「①嗜好性の低い色」では「ベージュ」の嗜好性は低かったにも関わらず、テーブルクロスの色としては好まれていた。このことから、一般的な色の嗜好とテーブルクロスに使用したい色は必ずしも一致しないことが示唆された。ベージュの嗜好性が高かったことについて、テーブルに使われている木の素材から「ベージュ」がイメージされたと考えられる。また、ランチョンマットを使わない場合、机の木の色とベージュの組合せは同一色相配色で色相に類似性が感じられるため、まとまりやすくなる。また、トーン差があるため、トーン・オン・トーン配色(同系色濃淡配色)となり、色彩調和がとれる。こうした配色のまとまりや美しさなどから、ベージュを選択する回答が多かったと考えられる。

## ④使用したいランチョンマットの色

1位の結果をみると、男子は「水色」、女子は「橙」、1位～2位の合計では、男子は「水色」、女子は「橙」「黄」であった(図13)。また、テーブルクロスとランチョンマットで使用したい色について、男子においては相違が見られなかった。女子においては、「橙」はテーブルクロスよりもランチョンマットで使いたいという割合が高く( $p < 0.05$ )、「ベージュ」( $p < 0.1$ )と「白」( $p < 0.01$ )はテーブルクロスで使いたいという割合がランチョンマットより高かった。

ランチョンマットに使いたい色相について、「ピンク・橙・黄・ベージュ」など暖色や明度の高い色相は男子に比べて女子の方が嗜好性が高かった。反対に、「緑・青・水色・白・黒」などの寒色・中性色・無彩色は、男子の方が女子より高かった。一方、「赤・黄緑・紫・茶」についての嗜好性は男女間でほぼ同じであり、男女とも「紫」と「赤」の嗜好性は低く、食卓の色として好まれない色であった。野村は、食卓においては、大きい面積では白か明るい色が、小さい面積には楽しい色が良いとしており<sup>42)</sup>、本調査でも同様の結果を示していた。

我々が美しいと感じたり、おいしそうと感じたりする感覚には、脳への視覚的刺激である色彩要素の影響が大きい。そのため、食材の色彩、食空間全体の雰囲気など色彩調和のバランスを意識することが必要である。食べものをよりおいしく楽しく食べるために、また、食卓演出を楽しむために、色彩に関する基礎知識を理解しておく必要があるといえる<sup>1)</sup>。

## 12) まとめ

食卓は単に料理を並べたり食べたりするだけの場ではなく、憩いの場であり、人間関係を形成する場である。テーブルコーディネートは、食卓に座る人のことを中心に考えて、食空間を演出することであり、目的に合わせて機能やデザイン、経済性などから構成要素を選択・整理する作業である<sup>1)</sup>。そのためには、構成要素に関する知識や想像力、計画性、創造性、選択力による創意工夫が必要である。食卓演出について学ぶことにより、おいしく味わう技術や感性が育成・鍛錬される。さらに、より広い視点で食に関する問題を眺め、かつ、多様に学ぶことができると考えられる。食卓演出に関する学習を行うことにより、学習意欲を向上させ、食に関する知識や技能のより確実な定着と応用、思考力・判断力・表現力などの力が育成されると考えられる。

## 4. 要約

食卓空間の演出に関する認知と学習状況について検討した。その結果、小・中・高等学校いずれにおいても、テーブルコーディネートについて内容や方法の詳細な記述はなかった。テーブルクロスは男女とも過半数に使用経験があったが、ランチョンマットの使用経験者は、女子に比べて男子の方が少なかった。また、テーブルリネンを使う理由としては「机が汚れない」、使わない理由は「なくても困らない」が多かった。テーブルリネンの使用やテーブルコーディネートに関する学習の導入について、男子に比べて女子の方が積極的な意見が多かった。テーブルクロスで使いたい色は白、ランチョンマットでは有彩色が多かった。一般的な色の嗜好性と、使用したいテーブルリネンの嗜好性は一致しなかった。現在の家庭科教育において、食卓演出に関する学習は十分とは言えない状況にある。今後は、食卓演出に関する教材開発を行っていく予定である。

本研究成果は須藤恵梨（当時、静岡大学教育学部4年生）の尽力による。また、アンケート調査にご協力くださった静岡大学教育学部の方々に深謝いたします。

## 参考・引用文献

- 1) フードデザイン研究会編：食卓のコーディネート（基礎）（2008）
- 2) 食空間と生活文化ラウンドテーブル：TALKテーブルコーディネーターテキスト（基礎コース）、優しい食卓（2005）
- 3) 浜裕子：和のテーブルセッティング，誠文堂新光堂（2010）
- 4) 斉藤薫：“食卓の色”にみる現代の食，vesta，No.53，pp.22～25（2004）
- 5) 文部科学省：小学校学習指導要領解説 家庭編（2008）
- 6) 文部科学省：中学校学習指導要領解説 技術・家庭編（2008）
- 7) 成田公子，中川尚美，長縄さくら：テーブルコーディネートの授業展開に関する一考察，名古屋女子大学紀要，第54号，pp.73～80（2008）

- 8) 伊藤知子, 中川寿子, 草尾賀子: テーブルコーディネートに関する女子大学生の意識調査—家庭でのテーブルコーディネートの状況について—, 平安女学院短期大学紀要, 34, pp.95-101 (2002)
- 9) 『わたしたちの家庭科』, 開隆堂 (平成16年検定)
- 10) 『新編 新しい家庭』, 東京書籍 (平成16年検定)
- 11) 『技術・家庭 家庭分野』, 開隆堂 (平成17年検定)
- 12) 『新編 新しい技術・家庭 家庭分野』, 東京書籍 (平成17年検定)
- 13) 『家庭基礎 明日の生活を築く』, 開隆堂 (平成18年検定)
- 14) 『家庭基礎 自立・共生・創造』, 東京書籍 (平成18年検定)
- 15) 『新家庭基礎 未来へつなぐパートナーシップ』, 実教出版 (平成18年検定)
- 16) 『新家庭基礎21』, 実教出版 (平成18年検定)
- 17) 『新家庭基礎 生活の創造をめざして』, 大修館書店 (平成18年検定)
- 18) 『明日を拓く 高校家庭基礎』, 大修館書店 (平成18年検定)
- 19) 『家庭基礎』, 教育図書 (平成18年検定)
- 20) 『新家庭基礎 とともに生きるくらしをつくる』, 教育図書 (平成18年検定)
- 21) 『家庭基礎 すこやかに生きる』, 一橋出版 (平成14年検定)
- 22) 『改訂版高等学校家庭基礎 自分らしく生きる』, 第一学習社 (平成18年検定)
- 23) 『家庭総合 明日の生活を築く』, 開隆堂 (平成18年検定)
- 24) 『家庭総合 自立・共生・創造』, 東京書籍 (平成18年検定)
- 25) 『新家庭総合 未来をひらく生き方とパートナーシップ』, 実教出版 (平成18年検定)
- 26) 『新家庭総合21』, 実教出版 (平成18年検定)
- 27) 『新家庭総合 生活の創造をめざして』, 大修館書店 (平成18年検定)
- 28) 『明日を拓く 高校家庭総合』, 大修館書店 (平成18年検定)
- 29) 『家庭総合』, 教育図書 (平成18年検定)
- 30) 『新家庭総合 とともに生きるくらしをつくる』, 教育図書 (平成18年検定)
- 31) 『家庭総合 すこやかに生きる』, 一橋出版 (平成14年検定)
- 32) 『改訂版高等学校家庭総合 生活に豊かさをもとめて』, 第一学習社 (平成18年検定)
- 33) 『フードデザイン』, 実教出版 (平成14年検定)
- 34) 『フードデザイン』, 教育出版 (平成14年検定)
- 35) 文部省: 小学校学習指導要領解説 家庭編 (1999)
- 36) 文部省: 中学校学習指導要領解説 家庭編 (1999)
- 37) 文部省: 高等学校学習指導要領解説 家庭編 (2000)
- 38) 富田圭子, 北山祥子, 小野真紀子, 饗庭照美, 大石貴美子: テーブルクロスの色が味覚に及ぼす影響, 日本色彩学会誌, Vol.28, pp.38~39 (2004)
- 39) 食空間と生活文化ランドテーブル: TALK テーブルコーディネーターテキスト (中級コース), 優しい食卓 (2006)
- 40) 松田博子, 名取和幸, 仲谷洋平: 大学生の色彩嗜好, 日本色彩学会誌, Vol.27, pp.100~101 (2003)
- 41) 野村順一: 色の秘密, 文春ネスコ (2006)
- 42) 渡邊康人, 上吉川武史: 嗜好色調査'88~'99, 日本色彩学会誌, Vol.24, pp.120~121 (2000)

- 43) 千々岩英彰：色彩学概説，東京大学出版会（2001）
- 44) 千々岩英彰：色彩の内包的意味に関する心理学的研究，武蔵野美大研究紀要，13，pp.62-80（1981）